

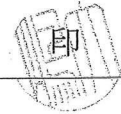
Low threshold to Vestibular and Oral Sensory stimuli might affect quality of sleep among children with autism spectrum disorder

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2021-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小坂, 拓也 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/00028725

学位論文審査の結果の要旨

※ 整理番号		ふりがな 氏 名	こさか たくや 小坂 拓也
学位論文題目	Low threshold to Vestibular and Oral Sensory stimuli might affect quality of sleep among children with autism spectrum disorder (前庭覚と口腔感覚の低閾値が自閉スペクトラム症児の睡眠の質に影響を与える)		
審査委員	主査	松崎 秀夫	
	副査	小坂 浩隆	
	副査	大嶋 勇成	
本研究は、幼児期の自閉スペクトラム症（ASD）児の睡眠障害の原因として感覚特性に着目し、アクチグラフにより客観的に評価された睡眠動態と感覚プロファイルによる感覚特性との関連性を明らかにすることを目的とした。 研究方法は、小児神経科医または児童精神科医により、DSM-5 に基づき診断された 3～6 歳の ASD 児 20 名、年齢と性別を一致させた定型発達（TD）児 20 名を対象とした。アクチグラフを用いて 1 週間測定された睡眠動態と保護者記入式の感覚プロファイルによる感覚特性との関連について強制投入法による重回帰分析を用い検討した。 ASD 群と TD 群間でアクチグラフを用いて測定した入床時刻、入眠時刻、起床時刻、総就床時間、総睡眠時間、睡眠潜時には有意差を認めなかった。入眠中の 1 分あたりの体動量、入眠後覚醒時間は ASD 群で有意に多く、睡眠効率が悪かった。また ASD 群において、入眠中の 1 分あたりの体動量と感覚プロファイルによる前庭覚低閾値のスコア、口腔感覚低閾値のスコアとの間に有意な正の相関を認めた。さらに、ASD 群において、入眠中の 1 分あたりの体動量を従属変数、口腔感覚の低閾値のスコアと子どもの眠り質問票によるむずむず足症候群や閉塞性睡眠時無呼吸症候群のスコアを独立変数とした重回帰分析では、口腔感覚の低閾値が最も入眠中体動に対する影響度が高かった。 本研究により幼児期の ASD 児における感覚特性（前庭覚、口腔感覚の低閾値）が入眠中の体動に関与している可能性が示唆された。ASD の原因や病態は不明な点が多く、行動特性の改善につながる有効な介入法は乏しいことが現状である。また乳幼児期の睡眠障害が、学童期の認知機能や多動性に影響することが報告されており、乳幼児期の睡眠障害への介入は重要な課題である。本研究で得られた結果から、ASD 児の睡眠障害の改善により認知機能や実行機能の改善を図るためには、ASD 児の感覚特性のうち前庭覚や口腔感覚を標的とした介入方法を確立させることが有用と考えられた。 以上の知見により、本研究は本学学位論文として十分価値あるものと認める。 （令和 3 年 1 月 7 日）			

最終試験の結果の要旨

※ 整理番号		ふりがな 氏 名	こさか たくや 小坂 拓也
学位論文題目	Low threshold to Vestibular and Oral Sensory stimuli might affect quality of sleep among children with autism spectrum disorder (前庭覚と口腔感覚の低閾値が自閉スペクトラム症児の睡眠の質に影響を与える)		
審 査 委 員	主査	松崎 秀夫	
	副査	小坂 浩隆	
	副査	大嶋 常成	
上記の者に対し、<u>口頭</u>により、学位論文を中心とした関連分野について試問 筆 答 を行った結果 <u>合 格</u> と判定した。 不合格			
(令和 3年 1月 7日)			